

「美しいことば」に関する学生の認識

伊藤 康代

〔1〕はじめに

幼児教育科の必修科目に「言葉と表現」がある。「言葉と表現」の「言葉」が、「国語」すなわち「日本語」を指すことは自明である。では、「……と表現」はどんなことをいうのであろうか。

幾多の「国語表現」関係のテキストの内容は集約すれば次の三大項目(~)になる。

ことばの機能に関する内容

1. 情報伝達(コミュニケーション)の機能
2. 自己表現および思索の機能

ことばの表現方法に関する内容

1. 音声言語の場合
2. 文字言語の場合

ことばの表現の場に関する内容

1. スピーチ
2. 会議
3. (研究などの)発表
4. 作文・小論文
5. レポート
6. 通信文・書簡文 など

しかしながら、この大項目の中には多数の細目があり、これを網羅して授業することは不可能である。そこで、限られた時数内で何を指導すべきかが、筆者にとって毎年度の課題となっている。毎年、テーマを定めてある年度では「分かりやすい表現」であり、またある年度には「正しい表現」であり、「的確な表現」であり、それに沿った教案を立てることにして

いるが、学生たちに何を残してやればよいのか。「ことば」をどのような財産として学生に与えればよいだろうかなどを思い、毎年、試行錯誤の連続である。

平成8年度のテーマは「美しいことば」とした。が、「美しいことば」の定義は難しい。「これが美しい単語である」と、単語そのものの美醜を決めることは不可能である。たとえば、「ばか野郎」という語のように、人をのしることばについてさえ、次のような例がある。

ある男の学生が病気になって入院した時のことですが、仲のよい友人が集まって、見舞いの寄せ書きをして贈りました。その中の一つに、「このバカやろう。お前みたいのが入院することはないだろう。すぐに出て来い!」とありました。……中略……ふだんのままの飾り気のない「バカやろう」という書き方が、この際は心がよく伝わり、親しみが増します。こういう時の「バカやろう」はさげすみではなく、励ましの意味で用いられている訳で、感激します。このように語詞そのものの要素では美しいと言えないことばでも、ポジションを得て、美しいことばに変身することになります。¹⁾

専門家や有識者の諸氏の言われる「美しいことば」の定義は、各氏によって項目立てはさまざまであるが、集約すれば

- ・ どのような人によって、どのような心情、どのような口調で使われるか
- ・ どのような状況、どのような文脈のなかで使われるか
- ・ 的確に機能を果たしているか

などによってことばの美しさは決まるとされる。各氏とも、特定の単語を挙げることは困難

1) 日本放送協会学園編 美しい日本語講座『ことばと生活

第2章』(執筆:伊吹 一)による。

であるとしておられる。すなわち、「美しいことば」があるのではなく「美しく話されることば」があることになる。

さて、授業を開始するにあたって、学生(1年生)が「美しいことば」をどのように認識しているかを調査した。

何らの先入観も抱かせないうちに学生の意識を問うために、第1回授業で、「美しいことば」と題する作文を課した。選択肢を与えてアンケートするという方法を避けて、作文の形で問うことにしたのは、選択肢の内容が学生の意識を左右するおそれがあるからである。

どんなことばを美しいことばと思うかを自由に書くように指示した。与えた用紙は800字分である。

作文の提出者は98名であった。うち15名の文章の主題は、今回の目的には適さない内容であったため、次項〔2〕のまとめに使用した作文は83名分である。ただし、1名の作文の中に複数の回答が挙げられているので、回答延べ数は83を超えている。

以下の稿は、その作文から抽出した、「美しいことば」についての学生の認識を整理したものである。

〔2〕作文「美しいことば」にみる 学生の認識

学生の作文による「美しいことば」の定義を大別すると、表1ようになる。

表1 美しいことばの定義

グループ	定義の基準	回答数
A	語詞の形態による定義	27
B	ことばの機能による定義	14
C	話し手の人格による定義	10
D	話し手の心の在り方による定義	12
E	話し手から聞き手への配慮による定義	31
F	発語の場による定義	19
G	耳への響き、音声による定義	7
回答数 合計		120

これをさらに分類すると次の表2～表8のとおりである。

表2 Aグループ

語詞の形態による定義の内訳		
ア	正しい日本語	7
イ	敬語	6
ウ	丁寧なことば	6
エ	標準語	2
オ	方言	1
カ	使い慣れたことば	1
キ	「ありがとう」「おはよう」	3
ク	短歌や俳句につかわれていることば	1
回答数 小計		27

Aグループのうち、「ア.正しい日本語」や「ウ.丁寧なことば」を挙げた回答者の文章では、みな、これとは逆の「正しくない日本語」や「丁寧でない日本語」について触れている。それによれば、回答者が考えている「正しくない日本語」や「丁寧でない日本語」は、「チョベリグ(超ベリーグッド)」、「チョベリバ(超ベリーバッド)」、や「チョムカ(超ムカツク)」などのことであり、この「チョ(超).....」は中学生や高校生の間で使われる流行語であるとし、それを聞くと非常に汚い感じがするとしている。したがって、正しい日本語や丁寧なことばこそが美しいことばであると述べている。

ところが、この「チョ(超).....」を容認するグループがある。後述のFグループである。

また、ここに興味のある現象があった。Aグループの、なかでもとくにア～エ回答者のほとんどが「美しいことば」の定義を一つしか挙げていないのに比して、Fグループの回答者はF以外の定義をも併せ挙げているという点である。

この現象から推量して、Fグループ回答者はことばのとらえ方が経験的で、かつ、ことばの使い方が弾力的であるのに対して、Aグループの者はことばのとらえ方が観念的であり、さらに、ことばとはこうあるべきものだという枠から出られないようだという仮定を試みたが、その仮定は早計であることを、第2回の作文のあとで知ることとなった。後述のとおりである。

「エ・標準語」 共通語と言わず標準語と言っている を美しいとした者は当然のことであるが「方言」を汚いとしている。なかでも、三河地方の「じゃん・だら・りん」を取り上げて美しくないとしている。

ところで、ここで“標準語が美しい”とした標準語肯定回答者はわずか2名であるのに、次項〔3〕の『温かい勘違い』への感想文のなかでは標準語肯定回答者は13名に増えている。それについては次項〔3〕で述べることにする。

「オ・方言」や、「カ・使い慣れたことば」を美しいとした回答者の作文内容からみると、この回答はFグループに属すると判断してもよいものであった。これについては、Fの項で述べよう。

「キ」の内訳は、「ありがとう」が2答で、「おはよう」が1答である。これらは、回答者の作文内容からみると、Eグループにも該当するとしてもよいものであった。今回の調査で具体的な「美しいことば」の単語例を挙げた回答は、全グループを通じてこの3答のみであったが、「ありがとう」「おはよう」は、多くの日本人が美しいことばと感じる代表的な単語である²⁾という点で、象徴的な回答と言える。

「ク・短歌や俳句に使われていることば」という回答が学生の年齢の者から出されたことは意外であったが、NHK放送文化調査研究所による調査（昭和40年）で、「美しいことば」として挙げられた単語852語のうち、和語が761語（全体

の89.2%）であったという。³⁾

今回、この種の回答は学生の中では1名のみであった。

表3 Bグループ

ことばの機能による定義の内訳		
キ	自分の意志や気持ちを正確確実に伝達できることば	2
ク	自分の意志や気持ちを分かりやすく伝達できることば	9
ケ	聞き手が理解しやすいことば	3
回答数 小計		14

ことばの機能を取り上げた回答が、回答総数の11.7%である。先にも引用したNHK放送文化調査研究所による調査ではおよそ20%であるのに比較して少ない印象もあるが、NHKの調査対象者が語学専門分野の人、学校教育者、ことばに関心をもつ人々であることから考えると、この数字の差はもっともなことであろう。実社会生活未経験の学生にとっては、ことばの機能とことばの美しさを一致させる経験が少ないのは肯える。

ところで、この回答数の中で気のつくことは、「ク・分かりやすい」「ケ・理解しやすい」を指摘した数が、「キ・正確・確実」を指摘した数よりはるかに多いことである。

中村明氏は『文章をみがく』（NHKブックス〔616〕1994刊）の中で、いい文章の条件の一つとして次のように言っておられる。

それでは、文章の正確さとは何か。「日が西に傾く」と「地軸が何度回転した」とはどちらが正確な表現なのだろう。科学的・論理的思考を機軸

2) 昭和40年にNHK放送文化調査研究所が全国の有識者500人を対象に試みた調査のデータによれば、「美しいことば」として挙げられた特定の単語数は852語、延べ語数にすると1,200語で、その中でもっとも多くの人があげたことばから順に並べると、

ありがとう さようなら はい おはようございます さわやか わたくし あなた
 さよなら おやすみなさい すみません どうぞ ありがとうございます いいえ
 いらっしやいませ おかあさん ほのほの ごめんなさい しぐれ たそがれ はは
 いただきます いってらっしやい うららか おはよう こんにちは ふるさと ...でございます
 である。

また、昭和50年に朝日新聞社主催、小学館協賛のシンポジウム「美しい日本語」を実施するにあたって朝日新聞社が実施した調査結果も、NHK調査とほとんど共通している。

（日本放送協会学術編 美しい日本語講座 『ことばと生活 第6章』（執筆：稲垣良彦）より）

3) この調査で挙げられた「美しいことば」852語のうち、和語は761語、漢語は82語、外来語はわずかに9語であった。この数字について稲垣良彦氏は、“やまとことばの良さを、わたたちは感じているわけです”と判断している。

とする文章ではむしろ前者のほうが正しい。言語表現は人間の認識を基盤とし、地球の自転は感覚的事実ではないからだ。

どういレベルの正確さを追うどのような種類の正確な文章でも、いい文章というものは、正確さを保ちつつも、そのためにわかりにくくなることを極力避ける。どれほど正確に記述してあっても、それが伝わらなければ「正確な文章」であることがほとんど意味をもたないからだ。

つまり、いい文章における正確さとは、分かりやすさに裏打ちされたものでなければ意味がないと述べておられるのであるが、このことは「文章」のみでなく「ことば」についても当然あてはまる見解である。

そのあたりの事情を、学生はおそらく経験上から感覚的に察知しているのではなからうか。

表4 Cグループ

話し手の人格による定義の内訳		
コ	人柄や態度の美しい人が発することば	7
サ	気持ちの美しい人が発することば	3
回答数 小計		10

表5 Dグループ

話し手の心の在り方による定義の内訳		
シ	自分の気持ちを正直に述べたことば	1
ス	自分の気持ちを素直に述べたことば	4
セ	感動を込めて話すことば	4
ソ	心からしみじみと話すことばなど	3
回答数 小計		12

C・Dのグループはともに、発語する人物の在り方によってことばの美しさが決まることを述べている。これを、あえてC・D二つのグループに分けたのは、作文内容によれば、Cグループの回答は

“人柄や態度の美しい人、あるいは気持ちの美しい人のことばは、おのずと美しい”としており、Dグループの回答は

“語詞そのものには多少の欠点があっても、話し手の心情によって美しくなることばがある”

としており、両者の間に認識の差が感じられた

からである。

また、Cグループの回答者が、“だから自分もそうになりたい”と願っているのに対して、Dグループの者は自分の発語のしかた、ないしは自分の会話相手の発語のありかたの現状を肯定している(なかには、こころの在り方が美しければよいということによって、自分のことばの力不足を棚にあげてしまおうという考えが見え隠れするものもあるが)のも興味深い。

表6 Eグループ

話し手から聞き手への配慮による定義の内訳		
タ	相手を思いやることば	10
チ	人の心を楽しく幸せにすることば	3
ツ	人の心を優しくしたり強くしたりすることば	1
テ	人の心を和やかにする温かいことば	1
ト	人に勇気を与えることば	1
ナ	相手の心を動かすことば	2
ニ	相手が快く感じることば	1
ヌ	相手を不快にしないことば	8
ノ	相手を傷つけないことば	4
回答数 小計		31

このグループの回答数が最も多い。さらに、Aグループの項で述べたように、「ありがとう」や「おはよう」を加えると34答になる。

「ありがとう」や「おはよう」を美しいことばとして挙げた作文には、これらのあいさつ語には人をなごませたり、元気づけたりするはたらきがあると書かれている。たしかにあいさつ語は人間関係の潤滑油であるから、これらの回答はEグループに加えて考えてもよいだろう。

また、Bグループの「ク 分かりやすい」と「ケ 理解しやすい」というのも、聞き手への配慮という点で、このEグループに加えることもできる。

それらを合わせると、“話し手の配慮から生じる美しいことば”を取り上げた回答数は、総回答数の40パーセントに当たる。この数の多さを裏打ちしているものを探ろうとして、第2回の授業で二つ目の作文を課したのであるが、それについては次項〔3〕で述べよう。

ところで、Eグループのうち「タ.相手を思いやる」～「ニ.相手が快く感じる」の項目は、

“話し手から聞き手への関係づけが積極的・前向きである”

のに対して、「ヌ.相手を不快にしない」と「ノ.相手を傷つけない」の項目は、

“話し手から聞き手への関係づけが消極的・後ろ向きである”

ことに気づく。

前者の回答の作文には自分が過去においてことばによる励ましを受けた体験談が述べられており、後者の回答の作文にはことばによって傷つけられた経験が書かれていた。

この差異が、次項〔3〕の感想文において、興味ある現象をもたらしている。後述のとおりである。

表7 Fグループ

発語の場に関する定義の内訳		
ハ	その場の状況に合ったことば	9
ヒ	時・場所に合ったことば	5
フ	時・場所・相手に合ったことば	6
回答数 小計		20

ハ・ヒ・フの定義は、互いに表現の仕方は異なっているが回答者の作文内容からみればほとんど区分のない共通の回答とみてよい。

このグループの回答には、次の2種の意識が含まれている。

その一つは、

“面接試験のようなときには敬語が使えないと困るが、敬語が美しいことばのすべてではない。むしろ、敬語を使ったがために美しさを損なうこともある”

というものである。敬語を意識外に追放しているのではない（むしろ敬語に自信がないという思いにとらわれている）。が、それ以外のところにことばの美しさを認めようとしているものである。（ここで、ほとんどの学生が、敬語使用の場イコール面接試験、としていたのは興味深い）もう一つは、

“チョベリグ・チョベリバなどに代表される

流行語も、それが生き生きと使われるときは美しいことばで有り得る”

というものである。親しい友人との会話では、改まったことばよりも身近な流行語の方が適しているという意見である。

Aグループの項でも述べたことであるが、この「チョ(超).....」ことばを美しいことばとして取り上げた回答者は、これ以外の回答をも合わせ挙げている。つまり、美しいことばの一つとして流行語を取り上げたい、他のことばではどうにも表現しきれない特別なニュアンスをもつ流行語が、自分たちの会話を楽しく円滑にしているという認識である。

方言や流行語を使い慣れたことばとし、自分の気持ちを最も表現しやすいことばとしている点では、Dグループの定義に共通するものである。

もっとも、学生たちの意識下の「時・所・状況」というのは、上に述べた2種類しかないので、授業の展開の中でさらに拡大した場を意識させる必要があろう。

これに関しては、次項〔3〕の中で、再考してみたい。

表8 Gグループ

耳への響き・音声による定義の内訳		
ヘ	耳に入ったとき心地よいことば	2
ホ	聞いたとききれいな感じがすることば	1
マ	歯切れよく発音されることば	1
ミ	リズムカルな口調で話されることば	1
ム	ゆっくり丁寧に発音されたことば	1
メ	声の大きさ・速度が適切なことば	1
回答数 小計		7

「ヘ.耳に入ったとき心地よいことば」の回答は作文の内容から、ことばの内容を指すのではなく、音声を指すものと判断してこのグループに加えた。

Gグループの回答内容は、将来、保育や介護の現場に立つ学生たちにとっては殊に重要なものとしてとらえていきたい。

〔3〕このことばを美しいと思うか 会話の具体例への感想

「美しいことば」と題する作文は、前述のように、第1回の授業で何の先入観も抱かせない状況で課したものであった。そして、この作文から抽出したデータを学生には伏せたままで、第2回の授業で新たな作文を課した。

第2回の作文を課すにあたっては、次に掲げる文章『温かい勘違い』を学生に与えて、“この文章を読んで、美しいことばという観点から感想文を書きなさい”とした。ただし、学生に与える際には題名は伏せた。

前回のデータを伏せたのと、『温かい勘違い』という題名を伏せたのは、やはり学生の意識を左右しないためである。

この文章は、中日新聞「くらしの作文」欄の掲載作品である。これを課題にした意図は、登場人物の老女の名古屋弁を学生がどのように判断するか、また、若者のノンバーバル・コミュニケーション⁴⁾をとらえることができるか、そして、この会話の美しさに気づくことができるか、を知りたいことである。

温かい勘違い

吉田 十四子(70歳)

屋下がりの駅のホームで見た若者の姿は「えっ」と人目を引くほどのいで立ちだった。

赤茶色の長髪が顔を覆い、小さな鈴が耳と鼻で揺れている。キラキラと金具のいっばい着いた、いかついジャンパー。よれよれのジーパンは、引き裂いたような破れからひざ小僧が顔を出している。これは全く国籍不明人だと思った。

電車が着き、同じ車内の通路を隔てた四人掛けの席に若者がドカッと腰を下ろし、その前に小柄なおばあさんがちょこんと座った。

しばらくして、おばあさんが若者に声をかけ

た。「おみやあさん、ひざの継ぎ当てしてくれるおっ母さん、いりやせんのかや」。すると、髪の間からニッと笑った若者がおばあさんに顔を寄せて「これは流行のファッション」。おばあさんは驚いた顔をして、「へえ、東京へ、か。祭りにいくのかや」

何とも奇妙なやり取りに、若者もキョトンとしていたが、急にヒラヒラと踊りのしぐさをした。

電車が駅に着き、若者はおばあさんにちょっと手を挙げ、カチャカチャと靴音をさせて降りていった。

私もホームを歩き出して、あっと気がついた。「おばあさんは流行を東京、ファッションをワッショイ、と聞き違えたのではあるまいか」。若者は、この勘違いをとっさに理解して、踊るしぐさでおばあさんを納得させたのではあるまいか。

ちょっとユーモラスな、テレビの一シーンを見ようような若者とおばあさんの出会いは、寒い日に温かく心に残った。

感想文の提出者は96名である。

このうち、25名(26%)がこの会話は美しくないと答え、71名(74%)がこの会話は美しいと答えた。

美しくないと答えた者の理由と人数は次のとおりである。

敬語を使っていない 12名

方言である 13名

の二つである。

この二つを合わせた25名という数字は、前項のAグループで「イ.敬語が美しい」「エ.標準語が美しい」と答えた者の3倍に当たる。この数差をどのように理解すればよいか。

第1回の作文でデータ対象となったのは83名分、第2回の作文は96名分、すなわち13名分の差がある。また、第1回での欠席者およびデータ対象外となった者と、第2回の欠席者とは必ずしも一致しないなどの点を考慮に入れれば、単純に数量だけで比較することは妥当ではないが、それにしても「3倍」は見過ごせない数字で

4) ノンバーバル・コミュニケーション(Nonverbal Communicatoin 非言語的コミュニケーション)は、言語表現に伴伴するもの(言語行動があってはじめて実現する種類のもの)と、独立して現れ得るもの(言語行動を前提としなくても実現し得るもの。実際には言語行動に伴うことが多い)とに大別される。

前者は、表情、しぐさ、口調、笑い、間投音、話し手と聞き手との距離の取り方などである(書きことば場合なら、筆記用具、用紙、字体など)。

後者は、服装、身だしなみ、態度、物腰、作法などである。

(『日本語講座 第五巻 話しことば書きことば 松野 善弘《美しい話し方》大修館書店 1990)

(福永 弘之『エクセレント 国語表現法』樹村房 1993)

ある。

そこで、第1回作文と第2回の感想文を、可能な範囲で比較してみた結論は次のようである。

第1回の作文でEグループ(話し手の配慮)やFグループ(発語の場)の回答をしたにもかかわらず、第2回では「敬語を使っていないから、美しくない」「方言であるから美しくない」と回答した者が十数名いる。筆者の認識から見ると、『温かい勘違い』の会話が美しいことばで語られていることは疑いない。にもかかわらず、Eグループ(話し手の配慮)やFグループ(発語の場)の回答をした者がこの美しさに気づかないのはなぜか。

その理由は、第1回の作文の中に探ることができる。

すなわち、学生の脳裏にあったのはあくまでも過去における自分自身の体験 若い女性にありがちな一種の友情論に基づいた体験 であり、その体験のみから判断した「美しいことば」の定義であつたらしい。それを、普遍的な場合にまで高めて認識することができていない。

なかでもEグループの「又、相手を不快にしない」、「ノ、相手を傷つけない」の項目を挙げた者が、とくに、『温かい勘違い』の美しさに気づいていない。ここで仮定できることは、ふだんの生活の中でことばを消極的な面からとらえている者ほど、『温かい勘違い』のことばを否定しているらしいということである。

この仮定へのフォローは授業の重要なテーマとしなければならないであろう。

さて、若者とおばあさんの会話は美しいと答えた71名(74%)の感想文のうち、7例を次に掲げよう。

(1)

この若者とおばあさんの会話は決して丁寧なことばを使っているわけではないが、周りで聞いている人に不快感を与えるような会話ではなく、逆に温かみや親しみを感じさせるものである。

美しいことばは、なにも、敬語をいくつも並べ

て話すことがすべてではないと、わたしは思う。ふだん、わたしたちが何げなく使っていることばでも、内容や話し方によっては、美しいことばになる場合も少なくないと思う。

そういう点から、この文章は美しいことばで書かれていると思う。

(2)

なんだかほのぼのとした、とてもいいお話だと思った。この場の情景が目には浮かぶ。

「美しいことば」とは、相手をいやな気持ちにさせないことばだと思う。だからこの文章のことばは「美しいことば」だ。その証拠にこの文章に出てくる人は、だれ一人としていやな気持ちになった人はいない。これを読んだ私も幸せな気分になった。こんな出会い、すてきななあ。

(3)

実際にその場を見聞きしたわけではないが、この文章を読んだかぎりでは何かほほえましい会話である。聞いていて悪い気がしない。むしろ、興味のひかれる会話だ。この文章の筆者が温かい気持ちになったのもよく分かる。

人の心に何か良いイメージを与えることばは「美しいことば」であると、私は思う。

(4)

おばあさんと若者のやりとりがとても愉快で、温かなイメージができた。

筆者の吉田さんは、おもしろい表現をしていると思った。たとえば、若者の姿を見て「国籍不明人」と書いているのは、思わず笑ってしまった。

この文章は、それぞれの場面に適したことばを使っているので「美しいことば」だと思う。敬語を使えば必ずしもよいのではなく、読み手にわかりやすくイメージできるのも、「美しいことば」のひとつだと思う。

(5)

この文章では、別に敬語を使っているというわけではないけれども、読んだ後に温かさを感じたので、「美しいことば」だと思う。

たとえ敬語を使っても、その内容が人の心をなじるようなものであつたら、それは美しいことばとはいえない。その敬語は単に外見だけを形どつたお飾りにすぎない。

(6)

「おみやあさん、ひぎの継ぎ当てしてくれるおっ母さん、いりやせんのかや」というおばあさんのことばは、方言のまじった、かならずしも聞きやすいことばではないが、温かみがある。また、若者のことばはぶっきらぼうだが、その行動が非常に温かい。これは、実際のことばではないけれ

ど「美しいことば」といえるように思う。

(7)

おばあさんと若者のやりとりは、美しいことばだ。たしかにことばだけを取り出してみれば、美しくないかもしれない。

けれども、読んでいて、たいへん温かい気持ちになれる。ことば、会話に温かみがある。

聞き違えたおばあさんをののしったりしないで、納得できるように返してあげる若者の態度は、なかなかできないことだと思う。

「美しいことば」。ことば自体も大切だとは思いう。が、そのことばに込められている思いは、もっと大切だと、わたしは思う。

ここに掲げた感想文は、第3回目の授業で学生に配付して、どんなことばを美しいことばといえよいかを語り合う材料としたものである。これらの作文には、ことばが、美しいことばであるためのいくつかの条件が、よくとらえられている。とくに(6)・(7)のなかで、若者の「行動」や「態度」のよさに目をとめていることは、言語表現の一つの要点であるノンバーバル・コミュニケーションを、すでに指摘する学生がいたことになる。

〔4〕おわりに

さて、このように「美しいことば」に対する学生の認識を一通り見てみると、その定義の分類に関しては、おおむねにおいて専門家や有識者の認識と大差はないことが分かる。このことは、「ことば」は学問の領域であるより先に、より大きくわれわれの実生活の問題であることの証明であろう。

ただし、専門家や有識者の認識が普遍的なものであるのに対して、学生の場合は自己の体験のみに基づいた、感情に左右されやすい、根拠の弱い定義であること、壊れやすいものであることが分かった。結局は、自己の基礎的な国語力にある程度の自信がなければ、「美しいことば」の認識にも弱さがある。

8年度のテーマは、「美しいことば」ではなく「ことばを美しく話すとはどういうことか」の指導であると知ったのであった。

参考文献(編著者名50音順)

- | | |
|---|---------------|
| 井口虎一郎 『日本語講座 第五巻 話しことば書きことば』より
松野 善弘《美しい話し方》 | 大修館書店 1990 |
| 影山 尚之 『日本語と表現の工夫』 | 双文社出版 1996 |
| 川崎 洋・小島ゆかり対談『ことばの表現力』婦人之友1997年10月号 | 婦人之友社 1997 |
| 金田一春彦 『日本語講座 第一巻 日本語の姿』より
南 不二男《日本語の敬語》 | 大修館書店 1990 |
| 金田一春彦 『日本語 新版(下)』岩波新書(新赤版3) | 岩波書店 1994 |
| 久保田 修 『日本語の表現』 | 双文社出版 1993 |
| 言語技術の会 『実践・言語技術入門』朝日選書396 | 朝日新聞社 1994 |
| 外山滋比古 『「ことば」は「こころ」』 | 講談社 1997 |
| 中村 明 『文章をみがく』(NHKブックス616) | 日本放送出版協会 1995 |
| 日本放送協会学園 『美しい日本語講座 ことばと生活』 | 日本放送協会学園 1985 |
| 日本放送協会学園 『美しい日本語講座 ことばと生活』 | 日本放送協会学園 1985 |
| 福永 弘之 『エクセレント 国語表現法』 | 樹村房 1993 |
| 藤原 与一 『私たちと日本語』岩波ジュニア新書30 | 岩波書店 1987 |